

えたことは当時の舞台背景からみてほぼ確実である。『掌中方』もまた『外台秘要方』の編集アイデアに由来する可能性が高いが、ともあれ、わが国独自の医方書の嚆矢として、今後研究に値する貴重な資料と考える。

(北里研究所附属東洋医学総合研究所・医史学研究室)

呉家の本家筋、豊田家の医師たち

○豊田裕治^① 豊田秀三^② 石田純郎^③

呉秀三の論述の中に、呉家の先祖は豊田姓を名乗っていたとある。呉一族が、中央に出て華々しい活動を行ったのに対し、豊田一族は故郷・呉にとどまり、地域医療に尽したのである。本日は呉秀三の父である呉黄石のいここにあたる豊田立碩と、その実子実頼と昭雄を中心に述べたい。

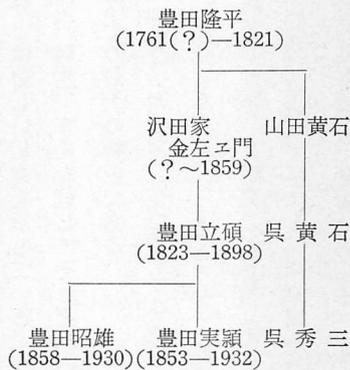
呉秀三の曾祖父が、豊田隆平(伊予中島出身 一七六一〇?)〜一八二二)であり、医師として働き、荘山田村(現呉市の中央部山の手)に移住し、沢原家の娘と結婚した。その長男が山田黄石(荘山田村生れ、一七八八〜一八二七)で、呉氏の始祖となり、次男が沢田屋金左エ門(荘山田村生れ、?〜一八五九)(薬種商)で、新家沢原を名乗った。金左エ門の三男が、もとの豊田姓にかえり、豊田倍次郎、後の立碩である。

立碩は、文政六年(一八二三)二月六日、荘山田村に生

れた。広島市の広藤道庵（一七五四～一八三二）及び、江戸の土生玄頌に医術を学び、莊山田村（現在呉市中央部の山の手）の長之木筋に、外科医・眼科医として開業した。兎唇の縫合手術が巧く、遠方より患者が集まったという。明治三一年（一八九八）二月一日没。享年七六才。

立頌の長男 実頌（みと 詢太郎。号…松雲）は嘉永六年（一八五三）二月六日、莊山田村に生れた。幼少より神童との誉れ高く、大阪の医学学校で学び、長之木筋の父親の医院を継ぎ、眼科医として開業した。後に中通三丁目（現在のジャスコ呉店の向い）に移転した。医業は、はやったようであるが、眼底が見えにくくなったという理由で、早く廃業した。

彼は医業以外に、行政畑や、教育者としても活躍した。明治一年に安芸郡上席書記、まもなく安芸中学、安芸師範学校校長と務め、明治一九年には莊山田村戸長となったが、明治二一年にはこれらを全て辞職して、安芸郡より県議會議員に選出された。またこのころ地方衛生會議員も務めた。明治二三年、改進黨より、第一回衆議院議員に立候補し、当選し一期務めた。また明治三六年から四四年まで、呉市の名誉職參事會員を務めた。余技として、漢詩に長じて



〔付 図〕

いた。昭和七年（一九三二）三月二十九日没。享年七八才。実頌には実子がなく、弟・昭雄の長男静春を養子とした。

実頌の弟昭雄も医師であった。昭雄は安政五年（一八五八）二月二日、莊山田村に生れ、やはり大阪の医学学校で学び、呉市の成町（現在の伏原、豊田内科の位置）で開業した。内科を専門とした。明治二年と一九年のコレラ流行の際に、防疫に尽力した。昭和五年（一九三〇）一月二三日没。享年七一才。

以上、呉地方の地域医療に尽した、呉秀三のまたいとこたちの事跡について報告した。

- ①岡山大学第二内科
- ②豊田内科
- ③三菱水島病院